



17日の朝、全校生が集って「なかよし集会」を開きました（右の二次元コード参照）。そして、この集会を序章として、この日、2年生が「リレーきょうそう」という教材を使って、人権について学ぶ授業を行いました。



この教材では、「てっちゃんがいるから、いつもぼくらのチームがまけるんや。」とみんながてっちゃんを仲間外れにします。泣き出でてっちゃんをよそに、みんなはてっちゃん抜きでリレーを始め、その結果、チームは勝ちます。しかし最後に、「うれしいのは、いちばんだけかな？」という問いかけで、この話は終わります。

みんなそれぞれ速さがちがうよ



「私は、この場面を考えたい。」

子どもたちは、「自分だったら、この話の中のどの場面で、どんな行動をするか」について考えました。てっちゃんが意地悪をされている時に注意して「一緒にやろうぜ。」と声を掛けるという子、てっちゃんが泣いているところで「大丈夫？ 先生に言いに行こう。」と寄り添う子など、それぞれが自分のできる行動を発表しました。

その中で印象的だったのは、てっちゃんを仲間外れにしようとする人たちに向かって、ある男の子が言った、次の言葉です。

「世界中の人、みんなそれぞれ速さがちがうよ。」

もう四半世紀ほど前に『輝ける子』という本が出版されました。副題は「100メートルを10秒で走れと言われてもさ、いっくら努力しても走れない奴っているじゃん」です。先ほどの子どもの発言を聞き、この本を思い出しました。

自分は生きている意味がある、存在価値がある、必要とされている、
という感覚を自己評価といい、これが大切（明橋大二、『輝ける子』(1万年堂出版、2002)より)

著者の明橋さんによると、自己評価（自己肯定感や自尊感情）は、自信とは異なり、「自分は生きている意味がある」「自分は大切な存在だ」「必要とされている」という感覚のことだと言います。

「リレーきょうそう」の話で言えば、走るのが遅いてっちゃんは、走ることにについては、自信はないかもしれません。だからといって、リレーから外されてしまえば、そこにてっちゃんの存在はなくなってしまいます。つまり存在価値が失われてしまうのです。

この授業では、次のような発言も子どもたちから出されました。

「リレーは、勝ち負けじゃなくて、みんなが楽しくするためのものだよ。」

「いろんな人がいるから、おもしろいから。」

勝っても負けても、てっちゃんがチームの一員としてそこにいて、みんなと一緒に楽しめていれば、てっちゃん存在価値が生まれていたはずです。

2年生の子どもたちがもし大人の言葉をもっていたなら、明橋さんが伝えたかったことをそのまま言い表していたのかもしれません。



「リレーは勝ち負けじゃないよ！」